

芥川だより

発行日 * 2025年3月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

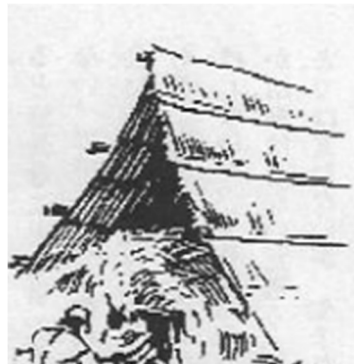
〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

君は50人に一人ぐらいだろう



山岳部の先輩に言われた言葉が今になって気づく。「お前の田舎から大学に入れた奴は50人にひとりぐらいじゃないか」その時は、うぬぼれの気分で聞き流していたが、その言葉は誉め言葉では無くて気を付けないといけないという意味を含んでいたのだ。

すこしばかり勉強をし、運にも恵まれ大学に受かったが何も特別な才能があったわけではなかったが、自分が少しばかり偉くなりそうな傲慢さが頭の片隅に居座り、

自分以上の賢そうな奴ばかりを追いかけ自分勝手な架空の世界を夢見て生きて、ますます実社会の人の暮らしや気持ちから遠のいてしまった。理解も出来ていないのに難しい本を読み言いふらす馬鹿さを恥じらいもなくまき散らして生きてきた。相手が自分の思い通りにしないときは、相手を責めていい気になっていたのだ。

街角に立って仕事をしていると実に多くの人々の生活を毎日見続ける。毎日同じ時間に子供を自転車に乗せて幼稚園に急ぐ人や、学校へ通う子や宅配の人など様々な生活が毎日毎日繰り返されている。一見すると意味のなさそうに見える人々も一生懸命に生きている。ほとんど同じような光景が繰り返されているように見えるが、実は毎日違うドラマがあるのだ。交通誘導をしていると、心配することも多いが実際には事故もなく上手く流れている。みんなが懸命に気を付けて行動しているから上手く流れているんだと感じる。

勉強が出来ると言われる人たちばかりと交わると私のような者は、安易にそれらの人々ばかりから影響を受けて実社会を見る感性を失ってしまう。実際には、交わる事のない多くの人がこの社会を作って動かしているんだということを感じなくする。実際には、勉学の機会に恵まれなかったり、生活環境から進学の機会が無かったりした多くの人たちの声を真剣に聞き彼らに寄り添い人々の苦悩と楽しみに向き合うべきだったのだ。何が問題で何が問題ではないのか、難しい本からではなく生きている人の生の声に耳を傾けることが大事だったのだと反省する。

死をめぐるあれやこれ(123)

石川 吾郎

高額療養費制度について思う

負担上限を引き上げるという自民の法案とそれに対する患者団体の反発のニュースを見て、マイケル・ムーア監督の『シッコ』(二〇〇七年)という映画を思い出した。これは米国の医療保険制度の矛盾を描いたもの。◆出だしのシーンが衝撃的だ。大腿部をケガした男性が自宅で自ら縫い針で傷口を縫っている。彼はお金がなく医療保険もなく医療をうけられない。次の場面は電動ノコギリで指を二本切断してした男性。指を二本繋ぐには高額の金額が必要といわれ、安い指を一本だけ繋いでもらった。次は夫が心臓発作を繰り返し手術をうけたが、その支払いのために家を売って息子を頼り転がり込む夫婦。そのために親子で諍いが起こる。このようなエピソードが次々と語られる。◆ムーア監督は米国民の医療費の負担の大きさを告発している。つまり米国の医療制度はお金がなければ享受できない。米国の医療保険は日本と違いほぼすべて私企業のもの。保険が保証する範囲は値段でランクがあり、医者も保険会社の保障の範囲でなければ治療ができないという現実があるようだ。◆これに比較すると日本の公的医療保険制度は、非常に優れたものと言える。その中でも最後の砦が高額療養費制度だ。この制度により医療費で破産するようなことは現状ではない。しかし政府のこれまでの動きを考えると日

本の保険制度をアメリカ型にしようとしていると思わせる。◆そうなれば米国の保険会社が今以上に日本に進出してくることになるし、実際すでにガン保険ではアヒル印の米国会社が有名だ。米国企業の利益に資するため、日本の保険制度を切り崩すことを狡猾に狙う勢力は存在している。私たちの社会が「命の沙汰は金次第」の社会に変質していくことは何としても食い止め、現在の優れた医療保険制度をこれ以上政治が壊さないように監視しなければならない。

芥川だより二一八号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム123	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 132	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 82	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 88	下村嘉明	3
ボケ老人の雑話 11	明石幸次郎	4
オクラの山たより 102	因了生	5
隠された歴史 77	満田正賢	8
俳句	影山武司	10
編集後記	SK生	10
ふみの道草 81	山椒魚	11

素老人☆よもだ帳 (132)

坂本一光

◆太陽を塊にする芋の知恵、あるいは、方円に従う水にある不屈、あるいは、本当に神がつくったヒトなのか

― 近江の農夫だより (その1)

大学のおなじ研究室出身で、職を引いた後自らを「近江の老農夫」と称する先輩がいる。再就職せず、近江の実家で畑を手に入れ農作業に精を出し芋と向き合っている。年に数回メールや葉書で季節のあいさつにかこつけた交流をする程度であるが、私にはこの老農夫の話が、実に深い刺激に満ちていて興味深く感じられる。しばらくお付き合いをお願いしたい。

(1) 近江の農夫より／二〇二四年一月

一日

能登沖地震の揺れがここ大津にも及びまして、正月の屠蘇気分も吹っ飛び、緊張しています。反して、脳気な事ですが、近況報告を添えて新年のご挨拶を申し上げます。本年もどうぞよろしくお願ひします。

新年明けましてお目どうございます。皆様のご多幸とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

昨年夏の暑さはまさに「沸騰する地球」を想わせました。炎天下の菜園維持

は苦勞でしたが、この中で少しの発見もありました。薩摩芋と柿は暑さに耐えて豊作、他方里芋は十分な灌水でも弱さが出て不作。地球温暖化の主因が深海底下のマグマの動きにあるとすると、この動態が沈静化するには百年、千年かかります、寒冷下ではジャガ芋を、高温下では薩摩芋を主食にするのが宜しいようです。

米、小麦を離れて薩摩芋で暮らすには訓練が要ります。ここ三か月、身体は大分芋になれましたが、それでも搗き立ての餅や焼きたてのパンを前にすると訓練した筈の主食の薩摩芋が直ぐに負けるのは面白いと思えました。

(2) 再び、近江の農夫より

いよいよ芋栽培が佳境に入ってきました。品種は徐々に増えて、現在6種です。芽を差してから100日で収穫します。

「きき酒」というより「きき芋」を期待しているところです。

以下、単なる思いつきです。どんなもんでしようねえ。態々の返信ご無用です。なにか思いつかれたらヒントや批判を下さい。

【思考実験です】

太陽エネルギーの利用と保存の観点からすれば、薩摩芋の葉は太陽電池、地下の芋は蓄電池です。ここで言う澱粉を電気に置き換えると、遠距離送電なしに、屋根で得た電気を、家屋や近隣遊園地の地下に貯める省エネシステムが実現しま

す。鉛電池はPb(原子量約207)が重いので、現在はもっぱら軽さを追求して、リチウムイオン電池でLi(原子量約7)が重宝されています。だけど、電気を地下に貯めるのであれば、その電池の構成は、軽量化よりは安全性の高い化学物質、つまり、硫酸ナトリウム水溶液、炭素電極、セラミック容器が理想になります。

電極の消極剤と復極剤は、 Mg (マンガン)あるいは Zn (モリブデン)あるいは Ca (バナジウム)です。仮に電池が地震で壊れても、漏れ出す物質は無害です。

畑で鋤を振り上げながら、こんなことを考えています。これが実用化されれば、原発のいくつかは不要になると思っております。この続きは何処かです。

日

(3) 近江の農夫様／二〇二四年一月十日
早々と賀状をいただきました。ありがとうございます。遅ればせながら新年のごあいさつを送ります。写真は三年前の賀状と同じアオツヅラフジで失礼をしています。

年末から年始は、こちらの川柳誌編集部長が入院手術後で作業が遅れたため、入稿準備に追われていました。昨日やっとなら大阪のネット印刷所に送稿したところです。

芋が行っていることは、人間が行う太陽光発電及び蓄電の過程と本質的に同じだと言う主張は興味深いです。川柳ではユーモア(滑稽)、軽み(ヘーソス、哀歎)と穿ち(物事を深くえぐる視点)が大事と言われます。芋と電池の話は、この穿ちに対応するもので、何となく分かった気になっていたことの本質を見せて、ハツとさせるものがあります。

送った川柳の一つ、「丸くなる四角にもなる水のまま」ですが、それは単に最もありふれた液体である水の性質の反映に過ぎず、方円に従う何という軟弱な水よと思っていた水。しかし、水は方円に従うとき、水であることの何も変えず、水のままなのです。そんな当たり前のことに気付き、我ながらハツとしました。そんなことを書いた文章(注1)も添付しました。ご笑覧ください。

(注1)「Be Water My Friends」(芥川だより)『No194』2023年3月1日号、ふみの道草(57)

(4) 近江の農夫より
忙しくされている中、態々のご返信有り難うございました。「Be water」を読んだあれこれ考えさせられました。今この所1回ですが、今後も折々に繰り返して拝読します。

恋歌の一首「瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ」(百人一首)7番、崇徳院から、水の柔らかさ

は感じていましたが、貴兄の説いて居られる点も大事ですね。これまで小生は、一つの細胞が兆の単位で集まって人体が形成され、人間が万や億の単位で社会や国家を作っていく仕組みに注意が向いて居ました。集合することの意味です。これから新しく、水分子の集合がなす技を取り入れてみます。

佳き一年になりそうです。この続きはまた近いうちに。取り急ぎメール拝受のお礼まで申し上げます。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲爺爺い」の時事放談(82)

祖蔵 哲

トランプ・ショック治療
のためお休み

先月は「トランプ・アメリカの創り方」をテーマに話したが、その後もトランプの話は世界のニュースを席巻している。その中でも2月28日にホワイトハウスで行われた米ウクライナ首脳会談は今日になっても余波が続いているほどのピツ

グイベントになった。それに先んじて行われた7日の日米初会談は「期待を裏切った」無難に乗り切った後であるが、日本は助かったでは済まされない。

さて、トランプ関連のニュースが圧倒的なので他の話題が小さくみえるが、日本では「令和の米騒動」が続いている。米価高騰の原因について様々な憶測が流されている。そしてその「噂」により価格が大きく変動する。消費者心理が市場価格を左右する。米にかかわらず情報資本主義社会では当たり前になってきている現象の一つであろう。

このような状況で今月はあまりにも先のトランプ・ショックが大きかったので他の話題が思いつかない。先月のプラグマティスト・トランプ分析がそのままの会談で出てしまったからである。それは、典型的なアメリカン・プラグマティストとしてのトランプである。彼の本業不動産屋はまさしく「結果よし」の「功利主義」である。不動産業は何も生産しない。ただ「取引」があるだけだ。そんな「取引」だけの政治に世界が動揺しているという事は、逆に言うと、今まで「世界」がまともな取引(協議、交渉)すらできていなかったことでもある。トランプの言うことは、ある意味、半分は当たっている。ということは「世界」のほうが半分はおかしくなっているということだ。

では「世界」とは何か。現在まで続く

「西欧」が築いた「世界」はもう存在しない。しかし、その原理だけが「世界」を動かしているのである。これが「世界の混乱の原因である。この「トランプ・ショック」から立ち直ったら、次号は「西洋世界の没落」で復活したい。では、しばし休憩。

大峯奥駈道(88)

下村 嘉明

体験型人間学 38

不運な男・X君

ふてくされたようなX君の態度から、彼がこれまで受けてきた世間の冷たさを感じた。たぶん彼は生まれてから今までずっと馬鹿だ、あほだと言われながらも、彼なりに一生懸命に生きて働いてきたが、年を重ねるにしたがい、彼が期待する評価を受けずやる気が薄らぎ酒の酔いに気を紛らわすようになったに違いない。親切な人もいただろう、熱心に彼を励まし支える人もいたに違いない。しかし、彼自身の生きる意思が弱くなっているのを止めることは出来なかった。人は所詮ひとりりで判断し行動を起こさねばならぬ

い。人を助けるという事は、基本的には出来ない。それは、本人の自由な意思が尊重されねばならないからだ。強要は人権侵害につながる。

厳粛な意味において、いかなる人間も孤独な荒野を旅するひとりの人間だ。右に行くか左に行くかは、本人が決断して歩み続けなければいけない。無常ともいえる彼の態度から、私は、誰もが陥る人間の持つ弱さ、不安定さを感じたのである。

ボケ老人の雑記(その11)

明石 幸次郎

男は自分の立場が上の人や、付き合っ
て利益になる人の意見や気持ちや付度し
たり、気を使ったりする。しかしながら、
自分より下の者とか、利益にならない人
のことは殆ど考えないか、はなから無視
してしまいがちである。それは、長い間、
組織の中で競争してきた習性がしみつ
いてしまっているからなのか、特に私のよ
うな民間会社で、そして社内外で競争し
て、少しでも利益を上げて自分の成績と
会社の成長に繋がる競争的利害活動(仕
事)をして来た男にとっては、リタイア

しても中々その習性から抜けきれないも
のです。

今は長年働いていた競争的利害活動と
は、真逆のボランティア活動を今年で10
年間やってきました。

それは、活動しても利益はなにもない
「自殺防止電話相談」組織で、相談員は
交通費、組織への寄付を負担しながら、
ただただ良き隣人を目指し、見ず知らず
の精神を病んでしんどい、苦しい、死に
たい人、又、人間関係に悩んで、中々解
決が見いだせない人の話を共感と寄り添
いながら聴いています。

そこで自分なりに気づいたことがあります。
一つは、これは哲学者の鷺田清一
さんも言っておられますが、「他人の悩み
を聴かせてもらうようになってから、自
分の意識を反転させて、悩みを自分が吸
い込むことにした。そうすると、自分の
悩みがワンオブゼムとして相対化できる
ようになった」ということです。

他人のしんどい悩みを聴いて、しんど
い気持ちを吸収して、それで自分もしん
どくなり、何でこんなしんどい何の得に
もならないボランティアをやっているの
かと悩み? 一人飲めない酒を場末の酒
場で飲んで家路に着くのが恒例になっ
てしまいました。ある時に、思い出したの
が、この鷺田さんが言われる、自分のし
んどい気持ちを反転させると人の悩みも
自分の悩みと、相対化することで少しは
しんどさが低減されると言う事でした。

人により深い悩み、しんどさを抱えて
いるが、それを聴いてくれる家族、友人
もいなく、その気持ちを吐き出すために
「いのちの電話」に電話され、どうしよ
うもない気持ちを話されます。このしん
どい気持ちを話すこと、吐き出すことで
人は重い気分が楽になることがあります。
話を肯定的に共感し聴いていると、相手
の声が最初の声と違ってくるのを感じま
す。それは、お互いが相手の声で自分の
話をちゃんと受け止めて聴いてくれてい
るか、そしてこちらが発した言葉に共感
して、自分を肯定的に受け止めてくれて
いると感じると、声がそれまでの重たい
沈んだ声から、軽い柔らかな声に変わ
ります。

反対に、こちらがしんどい、どうする
ことも出来ない話を傾聴して、共感的な
言葉を伝えても、逆に相手が怒り出し「あ
んたは、ちゃんと聴いてくれてるんか!
そんな慰め? の言葉はいらんから、ち
やんと聴け!」と突然エライ剣幕でまく
したてられる時があります。それは相手
の悩みの背景、深層を考えながらこちら
が返した言葉が非共感的に受け止め、ア
ンタは分かってくれてないと怒り出すん
ですね。それで相手が冷静になるまでず
っと話を聴いていると今度は「あんたは、
うんうんと聴いているだけか! アンタ
らは人の悩みを聴いて喜んでるんやろ!
相談員は人が悪い奴が多いわ」と声を荒
げて電話を切られます。

人それぞれですが、相手に投げかけた
言葉によっては、肯定的に受け止めて貰
ったと感じたり、逆に自分が下に見られ
否定? されたと感じたりする人も
いるんです。こんな時は、長く聴いてい
たのに何で怒り出したのかと、考えます
が、聴くことも発する言葉ももっと大き
く深く、多くを持たないといけないのか
などと自省します。

もう一つは、男は大体において、相手
に対して指示とか、解決策を言いたがる
ものです。私みたいなサラリーマンをや
っていた男は特にそうです。「こういう事
で悩んでいます。どうしたらいいんです
か? と相談されたら、すぐにこうした
らどうでしょうか? とか、これは、止
められた方がいいですよ? とかをつい
つい指示のように言ってしまう。

それは、過去の仕事柄で部下から相談
を受けると「君、こんなは、こうして、
こんな資料を作り、相手にこういつて話
をして、それを相手がそれはこうして下
さいと言われたら、分かりました。」と言
うようにすれば良いと解決策を出し、部
下に指示を出してしまいました。そ
れの延長線ですね。仕事上の部下と上司
と違い、悩みを抱えて電話をかけてくる
人は殆ど場合は、ただ話をじっくり聴
いて貰いたいと言う人が多いですね。ど
うしたらいいですか? と言いながらも、
もう自分である程度の答えを持っている
ようです。話しながら自分の答え自体を

こちらの反応を伺いながら確認しているんですね。

それで、女性相談員は女性の特性である忍耐力とやんわりと相手を受け止める力があります。余り解決策とか指示はしません。「どうしたら良いんですかね?」と聞かれても「そうやね? どうしたらいいんですかね? 本当に大変やね」となど言いながら、相手の言うこと更に聴いて本質的な悩みを聴きだそうとして「うん、そう、大変やね。まあ、話をも少し聞かせて下さいね、一緒に考えましょう」とか言いながら相手に寄り添い、共感と同じ目線で話し、大抵は指示をしなくて、「それで貴女はどうしたいの? どうすれば良いの?」とかを優しそうな声で相手に投げかけながら、やんわりと話のキャッチボールをしているようです。そのうちに相手も何等かの答えを見つけてるか、見つからなくても、精一杯吐き出したから気持ち楽になったと感じたら電話は終了するようです。

相談員はどここの組織でも大体8割以上は女性です。後の2割そこそこが男性です。残念ながら? 聴く力は女性の方が本能的にもっているようです。それは、飲み屋はおかみさんで持っているし、スナック、クラブもママさんで持っています。男性客の愚痴話、つまらん悩みグダグダ言っても「そうやね。たいへんやね。そう人間は我慢が大事やよ明石ちゃん」とかじつと聞いてくれてから言われ、酒

を注ぎながら、グラスにウイスキーをドボドボと入れながら、「まあ、ぐっと飲みなさいよ。又、良いこともあるわよ。人間我慢が大事よ」とか言われたら、「そうやな」と思いながら、つけの代金は忘れてしまい、又、定期的に馴染みの飲み屋に愚痴を聴いて貰いに行くのです。

まあ、相談員に向いていないと思いはがらも「良き隣人、良き市民たれ」と言った我が校祖の言葉を想いながら、ボケないように自己満足的ボランテアを今年もやっています。

オクラの山たより (102)

困了生

一

一八九二(明治二十五)三月、樋口一葉は「武蔵野」第一編に文壇デビュー作「闇桜」を発表します。いささか長い引用となりますが、その冒頭部分は次のようです。

隔ては中垣の建仁寺にゆずりて、
汲みかはず庭井の水の交はりの底
きよく深く、軒端に咲く梅一木に両

家の春を見せて、薫りも分かち合ふ
中村、園田と呼ぶ宿あり。園田の主
人は一昨年なくなりて、相続は良之

傾向が強い文体であるといえます。この
文体を用いて語り出される物語の梗概は
次のようです。

助廿二の若者何某学校の通学生と
かや。中村のかたには娘只一人、男
子もありたれど、早世しての一粒も
のとて寵愛はいとど手のうちの玉、
かざしの花に吹かぬ風(「続古今集」
に「咲き初むる簪(かざし)の花の千代を
へて小高くなるむ陰をこそ待て」という源
頼綱の歌がある)まづいとひて、願ふ
はあし田鶴(「あし田鶴」は「鶴」のこ
と。「後撰集」に「見え渡る浜の真砂や芦
田鶴の千代を数ふる数となるらむ」という
歌がある)の齢ながれとにや、千代と
なづけし親心にぞ見ゆらんものよ。
梅檀の二葉、三つ四つより、行く末
さぞと世の人のほめものにせし姿
の花は、雨さそふ弥生の山、ほころ
び初めしつぼみに眺め添はりて、盛
りはいつとまつ葉ごしの、月にい
ざよふといふも可愛らしき十六歳
……。

冒頭部分でまず目につくのはその文体
です。「闇桜」の文体は後の「大つごも
り」や「たけくらべ」での雅俗折衷体と
いわれるそれに比べると、「かざしの花」
や「あし田鶴」といった和歌内容を文中
に織り込んだ王朝風の雅びな文体であ
り、しかも「まつ葉ごし」といった掛
詞や縁語も取り入れたことで装飾過剰な

垣根はありますが、一本の梅の木を
共にながめ、一つの井戸を汲みかわす
園田、中村という両家がありました。
園田家の一人息子良之助(二十二歳)
と中村家の一人娘千代(十六歳)は幼
い時から兄妹のように仲の良いふたり
でした。二月半ばの夕暮れ時、二人は
摩利支天の縁日に出かけましたが、そ
の時もいつものように良之助の冗談に
千代はすねたり甘えたりしていました
た。その二人を千代が通う女学校の友
達の一群が見つけ、無遠慮な「おむつ
ましいこと」の一声と笑いを残して去
っていきましました。その時以来、千代は
これまでの良之助への想いを「恋」と
して意識し、恥ずかしさと恨めしさか
ら良之助に顔を合わせる事ができな
くなってしまいました。そして、ついに
は苦しきのあまり病床に臥す身となり
ます。千代の心を知った良之助は彼女
が形見として渡してくれた指輪をはめ
て千代を見舞いますが、もはや彼女の
命は今夜限りと見えました。外に出た
良之助に鐘の音がかなしく響き、夕闇
にほろほると桜が散っていくばかりで
した。

物語の内容を読んでいくとなんとひ弱

な女性を主人公にした物語であろうか、と現代の人間は思ってしまうが、これが十九歳の一葉が「二葉女史」という名のもとに作家としてスタートした作品なのです。

以前、書いたように書き出しの部分から「闇桜」は王朝文学の「伊勢物語」の第二十三段「筒井筒」を下地に置いた作品であると分かります。また、梗概から心をはつきりと打ち明けないまま死んでいきますが、これも「伊勢物語」第四十五段の話を踏まえています。つまり王朝物語を背景にして古典的な色合いの強い文体で書き上げた作品といえます。

しかし、この作品にはそんな一言であつさりと片づけられないものをいろいろと含んでいます。そのあたりのことをもう少し小説の細部に触れて見ていこうと思えます。

二

「闇桜」は「伊勢物語」の「筒井筒」を背景にしていると申しましたが、「筒井筒」にある一つの井戸を汲みかわす隣り合った家に育った幼なじみの男女の話はハッピーエンドで終わります。しかし、「闇桜」の方は千代の死という暗い結末を迎えます。これも「伊勢物語」第四十五段で親に大切に育てられた娘が恋する男に熱い思いを伝えようとしたが、口に

出せず、そのために病気になる死んでしまったという話を踏まえたもので、その点では目新しいものはないのですが、いくつかのことで見落としてはいけないところがいくつかあります。

なお、これから先の文章のキーワードは「青春」と「成長」です。

まず、注目すべきは良之助と千代の境遇です。園田家の主人である一人息子の良之助。中村家の一人娘の千代は一葉がそうであるようにやがては養子を迎えなければなりません。つまり、良之助は千代と結ばれることはありません。千代と良之助は福とは逆の結末が千代と良之助には待っていることを一葉は作品の冒頭から暗示しています。

「闇桜」という作品で謎のまま残された部分があるとすれば、それは千代の両親のことでしょう。明治の中頃で十六歳の娘といえは「年頃」であり、当時の人々の感覚でいえば親がきつく監視して結婚相手とはなりえない男性との交情を防ぐはずで、ところが二人で摩利支天の縁日に出かけていることから見てもそうした動きを両親はしていません。この「闇桜」を書いたとき一葉の関心は明治の家庭生活で生じている問題よりも、その背後にある養子制度に起因する若い女性の厳しい現実を書くことの方に向いていたのかもしれない。それは一葉自身が抱

えていた問題でもありますが、一葉が冒頭で記すのは良之助がすでに家を継いでいること千代が一人娘であり家を継ぐためには養子を迎えねばならない立場だということだけです。

さらに目を引くのは千代と良之助の二人があまりにも幼いことです。千代は十六歳で良之助は二十二歳。二人が結婚してもおかしくない年齢ですが幼いままで。そうした二人の様子は

良之助、お千代に向かふときはありし雛遊びの心あらたまらず……良さん千代ちゃん和他愛もなき談笑に、果ては引き出す喧嘩の糸口。最早来玉ふな。何しに來ん。お前こそ。のいひじらけ（「いひじらけ」とは「互いに言い合つて気まずくなる」こと）に見合さぬ顔も僅か二日目。昨日は私が悪かりし。此の後はあの様な我がままいひませぬほどにお許し遊ばしてよ。とあどけなく詫びられて流石にかしく解けてはあられぬ春の氷。

と書かれています。まさしく「雛遊びの心」という、まだ異性を意識するようになる以前の子供の時代にあるような、子供の樂園に二人が住んでいるかのようです。この幼さが「喧嘩の糸口」にもなるのですが、すでに日本が近代国家としてスタートして二十年余が過ぎ、その間の

社会の変容が二人に影響しているはずなのですが、二人はずっと子供の樂園に遊ぶ男の子と女の子のままの二人なのです。

また、千代が夢に見た未来の良之助の姿は

学校を卒業なされて何といふお役かわらず。高帽子立派に黒塗りの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ

というもので「うれしき夢」を見たとき千代は無邪気に喜んでいますが、この良之助の「出世」が二人にとって決して幸せな未来を約束するものではないことを千代がまだ気がついてはおらず、千代はまだ世の常識も知らぬ「子供の時間」の中にいるということの意味しています。

三

千代の「子供の時間」が終わりを告げるのは良之助と一緒に摩利支天の縁日に出かけた際に女学校の友達に背中をたたく「おむつまじいこと」と冷やかされた時です。

当時の若い女性に流行していた束髪的女生たちはすでに「恋愛」に目覚めていて青春真っ盛りの中にいました。子供と大人の間の成長期間ともいえる青春の時期に女生生たちはいたのです。

思えば発表された一葉の作品は二十を

少し越えるだけですが、その中で描かれたヒロインたちには我々が「青春」と呼ぶ時期がありません。彼女たちは「にこりえ」のお力のようにすでに完全に大人になつてゐるか、それとも「たけくらべ」の美登利のように子供から大人へと急に変身するか、「うつせみ」の雪子（恋人の自殺により精神に異常をきたし、狂気の中で死に近づいていく）のように青春をうまく通過できずに大人へと続く成長のコースからはずれて狂気の世界へと進んでいくかです。「闇桜」のヒロイン千代は一種の「成長」はしますが、それは順調に大人へと向かうコースではなく死へと向かうものでした。死に向かつていく千代の

「心の闇」ともいえる内容が語られるのが「闇桜」の中間部分です。

この中間部分を経て作品の後半では子供から大人の女性に突然変身した姿で千代はあらわれます。その変わりぶりは言葉使いの変化に見て取れます。

例えば前半で摩利支天の縁日に出かけるに際して千代は良之助に

良さん、お約束のもの忘れてはいやよ。……出かけにあの位願つておいたのに。……あら、いや。嘘はつか

り。と子供の言葉で話しかけていますが、後半ではすっかり大人の女性の言葉となつて病氣の見舞いにやってきた良之助に

良さん、学校が御試験中だと申すではございせんか。……それにわたしのところへばつかし来ておらしやうてよろしいんですか。

と語りかけています。幼い子供らしく良之助におねだりしていた十六歳の千代が後半では遠慮深い大人となつています。しかし、これは千代の心の内から発せられた言葉ではないでしょう。順調に大人へと「成長」することでできなかった千代は既成の「大人の女性」の言葉を表面的に使つていただけであり、千代自身の自分の言葉とでもいふべきものはそこには存在しません。

四

良之助を異性、つまり「他者」と意識するようになった瞬間、千代は無邪気な世界、男女の交情を意識しない「子供の樂園」から転落します。「他者」を意識することは同時に「自己」を意識し自己を発見することでもあるですが、千代の場合「自己の発見」は「自己の喪失」でもありました。このプロセスは「闇桜」の中間部分に書かれており、それを以下で追つてみます。

まず、「逢ひたし見たしなどあらはに云ひし昨日の心」であつた、すなわち良之助と分け隔てなく遊んでいた男女を意

識することのなかつた自分を失つた千代は「他者」となつた良之助の目に映る自分を意識するようになります。「恥ずかしくつつましく恐ろしく、かく云はば笑はれん、かく振舞はば厭はれん、とかりそめの返答さへはかばかしくは云ひも得ず」と、良之助がすぐそばにいなくても千代は彼の視線から逃れることができなくなつていきます。

そして、千代はまた夢を見ます。その夢で良之助は千代を妹として見ており「隠し給ふは隔てがまし。大方は見知りぬ。誰ゆゑの恋ぞ。……さらば誰を」と「恋する相手は誰か」と千代に尋ねるのです。夢の中の良之助は「兄」の立場から「妹」の千代を他の誰かと結婚させようとしてゐるといえます。すでに家を継いでいる良之助は養子と結婚する以外にない千代に対してはそれ以外の接し方がなかつたのです。

良之助の視線にしかと捕らえられていく千代。しかも彼は千代を「妹」としてみている。つまり、彼の目に「妹」として閉じ込められている千代です。こうしたことでは千代の青春は十全の発達をせざ、当然のことながら青春の後にくる大人の時代への道も閉ざされることとなります。不全のままに置かれた青春の悲劇とでもいふべきでしょうか。

虚構の兄妹の関係以上には決してなれないという縛りの中で輝きに満ちた青春の時期を送ることなく千代は悩み苦しむ

死の日を迎えます。

先ほど述べた「うつせみ」の狂女雪子も「闇桜」の千代も女学生という設定でした。女学生たちは明治文学の中では田辺花圃が「藪の鶯」で描いたようにハツラツとした輝かしい青春のシンボルでした。しかし、一葉は自分の描いた女学生にそうした「青春」を与えてはいません。一葉の描いた女学生の二人は「青春」という時期を満喫することもなく、またそれゆゑに「大人」へと「成長」することもなく、なんとも中途半端な一つのポーズで凍りついたまま固定されています。なぜ一葉は自ら創造した若い女性たちに青春という時期を与えることをしなかつたのか。一葉の文壇デビュー作である「闇桜」はそんな疑問を投げかけてきます。

最後に「闇桜」の文体について一言。最初に述べたように一葉は技巧・装飾過剰気味の王朝風の文体で「闇桜」を書いています。そうした「闇桜」の書き出しに比べ次に示す一葉の晩年の傑作「たけくらべ」の書き出しは一葉の作家としての目を見張る進歩がみられます。

廻れば大門（新吉原遊郭の正門）の見返りの柳いと長けれど、お齒黒どぶ（「お齒黒どぶ」は遊郭を囲んでいりどぶ川のこと）に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行き来にはかり知られぬ全盛を

隠された歴史(77)

満田 正賢

うらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申しき。

三嶋神社の角をまがりてより、これぞと見ゆる大廈(いえ)もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋(一棟の建物に十戸二十戸の住戸が連続して並んでいる長屋のこと)、商ひはかつふつ利かぬ処(「かつふつ」は「まつたく」の意。「かつふつ利かぬ」で「まつたくできない」の意)とて、半ばさしたる雨戸の外に、あやしき形(なり)に紙を切りなして胡粉ぬりくり、彩色ある田楽みるやう、裏にはりたる串のさまをかす。

すると一気に読むことができ、しかも遊郭吉原のようすを生き生きと記しているこの部分にはもはや「闇桜」にあった過剰な装飾や王朝風の雰囲気はありません。この文体の変化、それもわずか数年の間の急速な変化は一葉の魅力の一つです。以後、彼女の作品と実人生を負いながら彼女の姿容ぶりを追いかけていくと思えます。

なお、「闇桜」は何種類か発行されている樋口一葉の全集か菅聡子編集の「ちくま文庫 樋口一葉小説集」(筑摩書房 2005年刊)で読むことができます。

今回は、船王後墓誌に記された三人の天皇について考察します。船王後墓誌は、大阪府柏原市の松岳山(まつおかやま)古墳群から出土した船首王後(ふなのおびとおうご)の墓誌で、戊辰年(天智七年・六六八)に作られたと記されているものです。そこには、乎娑陀(おさだ)宮治天下天皇、等由羅(とゆら)宮治天下天皇、阿須迦(あすか)宮治天下天皇、という三人の天皇名が記載されています。そしてそれは敏達、推古、舒明という三人の天皇が実在していた証拠とされています。

山崎仁礼男氏は『蘇我王国論』(一九九七・三一書房)において、船王後墓誌が作成された戊辰年は天智三年(六六八)ではなくもつと後代であるとした東野治之氏の説を論拠に、墓誌の作成年は日本書紀完成後の七二八年であるとし、船首王後の墓誌が船氏一族によって、架空の日本書紀の世界(架空の天皇)を現実化する手段として作られたと考察しました。山崎氏は「日本書紀は、息長氏出身の広姫を敏達の最初の皇后に造作することによって、押坂彦人大兄の『皇太子の造作』そしてその子である舒明とその妃の皇極の『天皇の造作』をセットで造作した」ということを丁寧に論証しています。私は、この山崎氏の説に賛同しています。

が、船王後墓誌が架空の日本書紀の世界(架空の天皇)を現実化する手段として作られたとする山崎氏の考察には賛同できません。その理由は、三人の天皇名が日本書紀の漢字表記と異なっており、船氏の一族の名前も日本書紀の記述と異なることからです。

船王後墓誌が作成された戊辰年は天智三年(六六八)ではなくもつと後代であるとした東野治之氏の説については、古田史学の会の服部静尚氏が「東野氏が根拠とする闕字の使用については、養老令の闕字は厳格に天皇及び皇太子に關係する所に限定されているが、ここでは船氏一族の名前にも闕字が使われており、中国・朝鮮半島で行われていた貴人に対する闕字と見るべき」「当時は大仁を官位(官職の等級)としていないという根拠については、隋書倭国伝には『内官十二等有り、一に曰く大徳、次に少徳、次に大仁』とあり、同時代史料によって否定される」と反論しています。(『二つの古田説 天皇称号のはじめ』古田史学の会・関西例会・2019年)

まず、船王後墓誌の本文をご紹介します。

『船首王後墓版』銘『古京遺文』文政元年、狩谷望之

「表 惟船氏故 王後首者是船氏中租 王智仁首兒 那沛故首之子也生於乎娑陀

宮治天下 天皇之世奉仕於等由羅宮治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之朝 天皇照見知其才異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第(裏)三殞亡於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故戊辰年十二月殯葬於松岳山上共婦 安理故能刀自同墓其大兄刀羅古首之墓並作墓也即為安保万代之靈其牢固永劫之寶地也」

(服部静尚氏訳) 故船王後(狩谷は推古紀に出る船王乎「平の間違ひ」とする)は、船氏の中祖である王智仁(狩谷は欽明紀・敏達紀に出る王辰爾とする)の兒の那沛故の子に生まれた。乎娑陀宮治天下天皇(狩谷は敏達天皇とする)の世に生まれ、等由羅宮治天下天皇(狩谷は推古天皇とする)の朝に奉仕し、阿須迦宮治天下天皇(狩谷は舒明天皇とする)の朝に至り、大仁(正五位相当)第三品の官位を賜い、阿須迦天皇之末の辛丑年(舒明十三年、命長二年六四二)十二月三日亡くなった。故に戊辰年(天智七年、白鳳八年六六八)十二月に松岳山上に妻の安理故の刀自と同じ墓に埋葬した。その大兄、刀羅古の墓も並べて作った。即ち万代の霊を安らかにし永劫の宝地を堅固にするためである

服部氏の考察は、ここに現れる三人の天皇が近畿王朝のものではなく、九州王朝の王であるというものです。その根拠

として次のことを挙げています。

① 「治天下」する拠点となる宮の遺跡が大和にはない。この時代の治天下を支えられる候補地は博多湾岸と上町台地に絞られる。

② 舒明天皇の崩御日と「阿須迦天皇の末」の表記が合致しない。

③ 船王後がきわめて高位の人であるのに、敏達紀、推古紀、舒明紀とも一切出現しない。この墓碑の登場人物五名すべてが日本書紀に出現しない。

そして服部氏は、「日本書紀に出現する船氏王平、船史竜、船史恵尺があるが、これらの人物には王後に繋がる情報が無い。『日本書紀』・『続日本紀』と『船王後墓版』が、それぞれ別世界（前者は大和朝廷、後者は九州王朝）の記録である証拠である。」「敏達以前（難波宮造営より遙か以前）に近畿天皇家が天皇を自称していたとするか、天皇は九州王朝の天子の呼称とするかの二択問題である。」としています。

私は、この服部氏の考察には反対です。近畿における歴史は日本書紀の記述とイコールではありません。日本書紀と古事記の記述は異なります。たとえば、宣化天皇の皇子・女と欽明天皇の皇子・女の記述の違いは顕著です。（*「欽明紀の真実」（隠された歴史（22）（23））参照）これは、日本書紀の記述が近畿の歴史そのものではないことを示唆していま

す。すなわち、日本書紀の記述にないからと言って、それが近畿の異なる歴史を記している可能性を否定するものではないということですが、船王後墓誌は、大阪府柏原市の松岳山（まつおかやま）古墳群から出土したと伝えられており、九州王朝に話を飛ばす前に、近畿に日本書紀と違う歴史があった可能性を探るべきです。

日本書紀に記された歴史が近畿の歴史そのものではないとすれば、日本書紀の記述にないことを根拠に九州王朝の天子が当時天皇を呼称していたという結論を引き出すことはできません。九州王朝の天子が天皇を名のっていたとするならば、九州王朝の本拠地であった九州でその根拠を見出すべきです。

船王後墓誌に記された三人の天皇は誰かという問題を探る上で、まず天皇という称号がいつ使われるようになったかという問題を考えます。一般的には天皇という称号は天武朝あたりから使われるようになったと考えられています。私、推古二十八年（六二〇）に蘇我馬子と皇太子が編纂したとされる『天皇記』にヒントがあるのではないかと考えています。そこで注目されるのは、隋からの使者として隋書にも日本書紀にも記載されている裴世清の役割に関する野田利郎氏の仮説（「隠された歴史（69）」参照）です。

野田氏の仮説の中での一つの論点を改めてご紹介します。

① 隋の煬帝は多利思北孤の国書に対し、「蛮夷の書、無礼なる者あり、復た以て聞するなかれ」と鴻臚卿に命じた。（隋書）

② 鴻臚卿は、部下である鴻臚寺の掌客裴世清（*文林郎裴清は唐代の役職）を倭国に派遣し、帝の意を成し遂げるよう裴世清に指示した。（*野田氏の推定）

③ 裴世清は倭王との面談の後、「朝命既に達せり」（隋書）と述べている。朝命は「蛮夷の書の無礼を正すこと」であり、天皇の国書に「東の天皇」と称して「天子」を改めている。（日本書紀）これは「朝命既に達せり」と内容が一致している。裴世清が倭王に何らかのアドバイスをしたのではないか。（*野田氏の考察）

注目すべきは、裴世清来訪の十二年後の推古二十八年（六二〇）に「是歳、皇太子・嶋大臣共議之、録天皇記及國記、臣連伴造國造百人十部并公民等本記」という記事があることです。この「天皇記」という書の題名と裴世清の役割に関する野田氏の仮説を結びつけると次のような仮説が導き出されます。

① 天皇という呼称は裴世清によって近畿王朝（蘇我馬子が実権を握る欽明王朝）にもたらされた。

② 蘇我馬子は和和において即位した初代「天皇」以降、歴代の「天皇」が近畿において倭国を支配してきたという史書の作成に取り掛かった。それが、十二年後に「天皇記及國記」として完成した。この時に近畿王朝の歴代の王は初めて「天皇」という呼称で記された。

「天皇記及國記」作成の動機について考えてみます。日本書紀の記述によれば、隋の皇帝の親書は近畿王朝に渡っていません。裴世清は、近畿（法興寺）を訪れて「倭王」と面談しましたが、この時すでに、「倭王」と自称する人物が、朝鮮半島諸国から聞いていた真の倭王（阿蘇山のある九州王朝の天子）ではないことに気付いており、その不信感を小野妹子に率直に伝えたのではないのでしょうか。なお「阿蘇山のある九州王朝の天子」の問題については、同じ野田利郎氏の考察を「隠された歴史（59）」で紹介していますので、参考にしてください。

蘇我馬子は小野妹子から隋の皇帝の親書がもらえなかった真の理由を聞き、それが「天皇記及國記」の作成の動機ともなったのではないのでしょうか。更に想像をたくましくすると、裴世清は、帝の親書を「倭王」に渡さなかった理由を鴻臚卿に報告し、そこで鴻臚卿はこの時の交流を「倭国」ではなく「倭国」との交流と報告した可能性もあるのではな

いでしようか。

次回はよいよ船王後墓誌に出てくる
三人の天皇に迫ります。

編集後記

SK生

俳句

影山 武司

三寒の「小吉」結ぶ四温かな
暗闇のほのやはらかし節分会
聴診器の拾ふ鼓動や春立つ日
道草の声のかたまり花菜風
下校子に返す挨拶初桜
春の耕大地の畝を押し開き
風に乗る紙飛行機や春の空
抽出しの奥より旅券木の芽時
プリズムの春の七色集めけり
分水の堰を溢るる春の水

▲トランプ米大統領の政治が本格化し、一段と極右の台頭、自国の利益優先、軍備の拡張が世界各国で目立つようになってきた。これまで人類が培ってきたさまざまな道徳や知識、理想が崩壊しつつあり、はびこるのは欲望の肥大化と暴力だ。まさにニヒリズム、そして、虚無と絶望が跳梁する世の到来である。▲こうなるとA・デュマ作「巖窟王」の主人公モンテ・クリスト伯爵の言葉「待て、しかし希望せよ」が頭に浮かぶ。絶望的な状況の中でもそれに耐え続け、希望し続けることの大切さを述べた言葉だ。目の前にある絶望はよく見える。しかし、希望は見えにくい。▲芭蕉の高弟服部風雪の句に「がつくりと暇になる日の永(なが)さかな」がある。もうすぐ春日遅遅たる時季がやってくる。ここは焦らず光を探してみようか。



信濃の道祖神

京都府立植物園の早春の草花展より



応募川柳誌上句会の選評③

選評も第三回目となった。自分の心に響いた句を選ぶのが選句である。何者にも何物にも遠慮せず、句の内容とその表現の形式を総合的に判断する作業だが、

選者は読み手としての能力を作者や読者の前に晒すことになる。しかしそれだけではない。晒すのは能力にとどまらないのだ。何を採らなかつたかは一般にわからないが、何を採つたかは明白である。選句によって選者は、自らの内なるものを晒す。しかも他人の句をとおして晒すのである。選者など、おいそれと引き受けるものではないと時々思う。

○課題「祖母」の部

特選

イマジンを聴けば泣くだろ二〇二歳

冬馬

秀句

母にないゆるみがとても好きだった

けい

順番にばあちゃんと寝た昭和の日

幸栄

白無垢を見ては平和を願う祖母

時雨

【選評】

特選／激動の時代をただひたすらに生き、ありうるかもしれない別の世界など思いもしなかつた祖母。イマジンを聴けば泣くだらうなど、祖母の人生に寄り添う。

秀1／母が子どもにも接する気持ちは、祖母になつても同じ。祖母は、歩いた道のりに比例するように、自らと子どもを繋ぐ手綱を長くできる。

秀2／昭和は子だくさん。今日は私、明日は僕と、ばあちゃんの側を取り合つた。

秀3／戦時中のような結婚式を二度と娘たちにさせてはならないのだ。

○雑詠の部

特選

投げ返す力はいつも溜めてある

まりこ

秀句

じゃんけんで決着つける平和主義

吟友

最短が直線だとは限らない

聖

人と街が潤うほどの雨でいい

千枝子

【選評】

特選／「自己の課題に深い信念を持つ者は容易に戦わず、しかし戦うときには断固として、たとえ一人でも戦うのである」。そんな力を少しでも。

秀1／じゃんけんの平和主義。「汝の敵愛する前に作らない」平和主義が一番秀2／歩いた道のりが詠ませたか。断言する句の力。

秀3／「空の上こんなに水があつたか」。待つたなし気候変動。



ヒユガオウレン



琵琶湖疎水分流にて



京都府立植物園にて